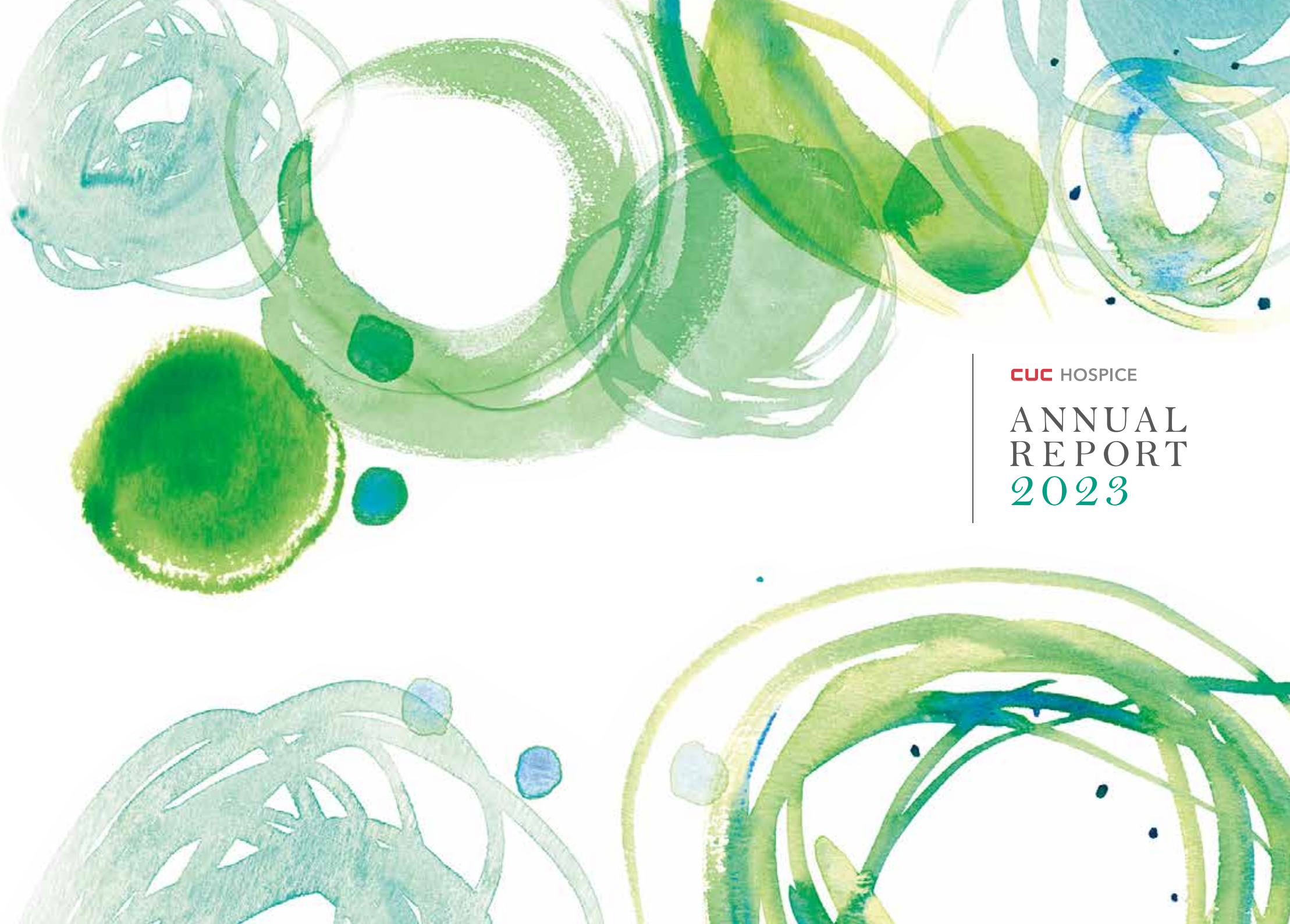


CUC HOSPICE

ANNUAL REPORT 2023

ここに、らしく生きる、ホスピスがある。

今日も、たくさんの“生きる”と向き合っています。

自分の手でおにぎりが食べたい。

秋の訪れを教えてくれる、
七輪の秋刀魚。
香りだけでも、堪能したい。

薔薇は強いのよ。
小さな苗木から、
大きく、元気に育てていく。

来年も桜が見たい。

寿司屋に行くために
リハビリをがんばらなきゃ。

「最期に自宅で家族と過ごしたい」
亡くなる前日に叶えた希望。

医師に難しいと言われながら、
娘の大学卒業を見届けることができた。
次は？ 息子の結婚式を見届ける。

家族と山に登りたい。
地域のリハビリセンターも、
ご家族もワンちゃんも、みんなで応援。
山開きが待ち遠しいね。

ネイルアートやヘアカラー、ガーデニング。
小さな楽しみで、毎日を彩りたい。

今晩はぬる燗と
おでんで女子会。
新しい仲間と集まる
よろこびができた。

体が自由に動かなくても
いたずら好きは変わらない。
ハロウィンは衣装を着て、
みんなを「あっ」と驚かせたい！

もういちどだけ、
湯あがりの肌で風を感じたい。

私たちは、あきらめない。

重度の病や障がいにより
生きる場所を見失いそうなすべての人に
ひらかれた場であることを。

自分らしく生きたいという尊厳を大切にし
あらゆる可能性を探り、叶えていくことを。

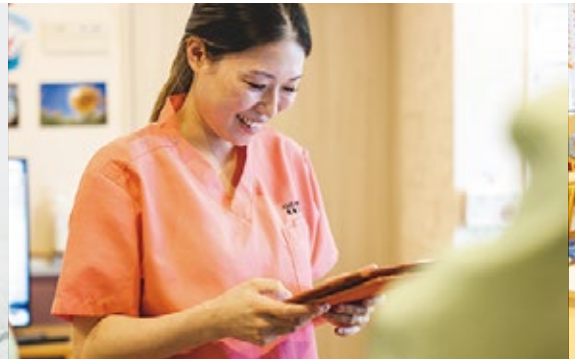
ホスピスが、
希望がふたたび生まれる場になることを。

看護と介護でよりそう家

ReHOPE

2023年、ReHOPE（リホープ）として歩みはじめました。

「再び、なんどでも」を意味する「Re」、「希望」を意味する「HOPE」。
重度の病や障がいと向き合うなかでも「希望を再生する場所」と名づけました。
一人でも多くの方にその希望を届けたいという意志を込めています。



CONTENTS

07 提供価値の磨きかた
08 実績ハイライト

12 CROSS TALK 創業者×社長 対談
16 SUPPORTERS INTERVIEW ReHOPE 堺北 訪問診療医
18 SUPPORTERS INTERVIEW NPO法人あたたかい心 理事長

22 CHALLENGE 01：どんな状況でも、希望をふたたび生みだす。
24 安心・安全 ｜ 看護と介護の力であたりまえの日常を。
26 意思決定支援 ｜ 心に寄り添い納得できる選択を。
28 希望の実現 ｜「やりたい」という想いに叶える方法を。

30 CHALLENGE 02：社会の期待に応える、組織をつくる

36 私たちがつくりたい「希望がふたたび生まれる場」

38 Our Philosophy 私たちの理念
42 施設情報
44 マネジメント体制・会社情報

提供価値の磨きかた

重度の病や障がいと向き合ってきた豊富な知識と経験を活かし、ご入居者さまの希望を再生することに取り組んでいます。そして、お一人お一人と向き合うことの積み重ねを通して、安心して暮らせる地域、そして病や障がいがあっても人生をあきらめない世の中をつくっていきます。

価値の源泉＝現場力

現場を支える

スタッフとの向き合い方

看護・介護プロフェッショナルの
採用・育成

病・障がいと向き合う意思がある
スタッフの採用

- 「やり切る覚悟」のある施設運営リーダー
- 重度の病・障がいのケアを極めた現場専門職
- 特定分野の知識を深めるスペシャリスト

ご入居者さまへの提供価値を高めるための
働きがいと定着率を向上する施策

働きがいの向上 → 定着率の向上 → 提供価値の向上

- 従業員の声を聴くアンケート
- ホスピスケアを学ぶ研修
- 従業員の有給休暇を促進する制度
- 理念を語り合う施設読書会
- 理念体現を褒める表彰制度
- 提供価値を語るエピソードキャンパス

最新技術・情報

ケアの品質を高め、スタッフの負担を減らす
テクノロジーの導入

現場で積み上げてきた、病・障がいに関する
データの活用

施設

ご入居者さまが安心して過ごせて
スタッフもケアがしやすい
施設の設計

サポート体制

安心な療養を実現する
医療安全の確保

専門性の高い
コーポレート部門による支援

ご入居者さまに向き合う

希望を実現するチーム力

ケアを進化させる3つの技術

- 要望・本音を**汲み取る**
- 進行に伴い変化を**見通す**
- 答えがない状況で**判断する**

専門的な知識・技術の標準化

看護・介護の技術
- 現場で積み上げてきた経験や最新情報をもとにした実践方法・手順の蓄積・共有・向上

円滑なコミュニケーション
- 相手に配慮しながら自身の考えを伝える「アサーティブコミュニケーション」研修の導入

効率的な施設運営
- 見学や入居対応・障害福祉サービス申請の型化
- 身体拘束や虐待防止などのマニュアル化

外部との協力

- CUC Partners※を含む地域の医療パートナー
- 社会保障サービスや地域・社会資源の活用

あきらめない組織文化

Way（歩み方・行動規範）※Wayの本文は39ページよりご覧ください。

提供価値

Mission
「前を向いて生きる」を支える。

地域社会への提供価値

どんな重い病や障がいにもともに向き合う

不必要な入院を防ぐ

ご入居者さまへの提供価値

- **希望の実現**
  「やりたい」という想いに叶える方法を。
- **安心・安全**
  看護と介護の力であたりまえの日常を。
- **意思決定支援**
  心に寄り添い納得できる選択を。

価値を届ける取り組み

- 素早い受け入れ
- レスパイトケア
- リハビリ・離床ケア
- 呼吸器ケア
- グリーフケア
- 雇用創出
- 地域包括ケアシステムへの貢献

目指す未来

Vision

どんな生きるにも向き合い
「希望が生き交う生活の場」を
日本へ、世界へ、広めていく。

※CUC Partners（パートナーズ）とは、CUCグループの企業とCUCが経営をご支援する医療機関を含めた総称です。

OVERVIEW 実績ハイライト

重度の病や障がいと生きる
ご入居者さま、ご家族の希望を再生するために。
これまで培ってきた経験や知識を土台に、
サービスエリアの拡大とケアの進化に
取り組みつづけます。

エリアの拡大

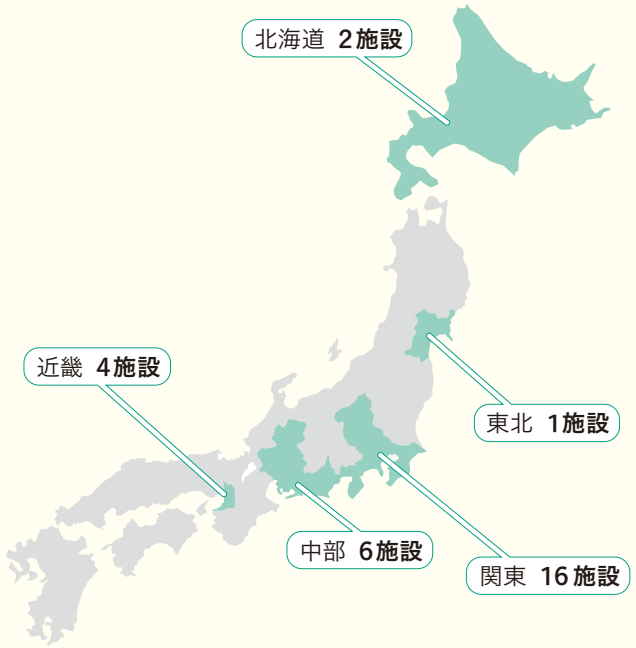
より多くの方にケアを届けるために、2017年の創業から現在に至るまで、
日本中にスピード感をもって施設を展開しています。

施設数
※2023年3月末時点
29 施設

定員数
※2023年3月末時点
1,145 名

新規開設数
※2023年3月期
+4 施設

施設で働く
看護師・介護職の総数
※2023年3月末時点
743 名



ご入居者さまのケア

ケアの最前線で重度の病や障がいをもつ方に寄り添い、
さまざまな症例と向き合う実績を重ねています。

難病指定の
ご入居者さま
※2023年3月末時点
406 名

要介護4・5の
ご入居者さまの割合
※2023年3月末時点
59.5 %

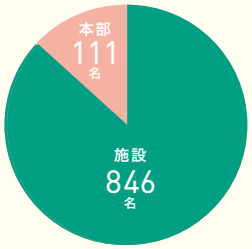
受け入れ実績のある
別表7疾病の症例数
※2023年3月末時点
17 症例

お看取り数
※2022年4月～2023年3月
817 名

スタッフの採用・育成

多彩な強み・専門性をもつプロフェッショナルとともに、
安心して暮らせる地域社会の実現に挑んでいます。

全スタッフ
※2023年3月末時点
957 名



採用人数
※2023年3月期
注）臨時従業員を含む。
475 名

スタッフの女性比率
※2023年3月末時点
77.9 %

管理職の女性比率
※2023年3月末時点
64.7 %

EPISODE CANVAS 01

【 EPISODE CANVAS 】

「エピソードキャンバス」は、1年を通して「『前を向いて生きる』を支える。」を体現した取り組みを共有し合い、
もっとも共感を集めた施設を表彰するイベントです。 2023年度の準グランプリに輝いたReHOPE 橋本のエピソードをご紹介します。

残された時間を、自分らしい姿で生きつづけたい。

ReHOPE 橋本
Yさま（50代女性）　病名：多系統萎縮症

Yさまは数年にわたりご自宅で療養されていましたが、「弱っていく姿を子どもたちに見せたくない」と考え、ReHOPEに入居。進行性の神経難病に罹患しながらも、小学4年生の娘さんの中学校への入学を見届けることを目標にしていました。入居された当初は歩行訓練をしたり、車いすからトイレに移乗したりと身の回りのことができていましたが、徐々に病気が進行。娘さんの小学校卒業が目前に迫ったころには呼吸状態が悪化し、気管切開の必要に迫られました。当初は気管切開を希望していませんでしたが、娘さんの晴れ姿を見られなくなる危機感から、迷いが生じます。「娘は私にどんな姿でも生きていてもらいたいのかな。どうしたらいいのだろう」と不安な気持ちを口にすることが増えました。その姿を見て「決して急かしてはいけない。Yさまが納得しないまま先へ進めば、混乱してしまう」と考えたのです。後悔のない選択をしていただくために、医師や看護師からメリットとデメリットを繰り返し説明し、配偶者さまも交え、幾度となく話し合いを重ねていきました。最終的にYさまが出した答えは「気管切開を行わない」。「残された時間を、自分らしく過ごしていきたい」と考えての決断でした。現在、Yさまは呼吸状態が不安定ながらも、文字盤を使って会話をしたり、介助を受けながらご家族とのテレビ電話を楽しんだりしています。窒息のリスクがあり、その時期まで生きることが難しいとされていた、娘さんの中学校入学も見届けられました。難病の方は、病気の進行にともない、さまざまな意思決定をする必要があります。ご本人が納得のいく選択をできるようにともに向き合い、悩み、選択を受け止めていきたいです。

CROSS TALK

創業者 × 社長　対談

何度でも希望を再生する挑戦を
地域と手を重ねて加速させる。

代表取締役社長
井上正明
Masaaki Inoue

取締役 Founder
吉田豊美
Toyomi Yoshida

創業者・吉田豊美の想いに共感し、1年前にCUCホスピスに参画した井上正明。ふたりで手を重ねてきた歩みを振り返りつつ、現在の心境と今後の挑戦について語ってもらいました。

Profile

吉田豊美

株式会社シーユーシー・ホスピス
取締役 Founder

地域で高齢者を支える仕組みが必要との想いから、病院で働く看護師から訪問看護の世界へ転身。しかし、自身が理想とするサービスと現状のあり方に乖離があったことから“ホスピス型住宅”という看取りのビジネスモデルをゼロから創出した。CUCホスピスの取締役Founderに就任した現在は、ひとつでも多くの希望を再生するために、理念の浸透をはじめとする取り組みに注力している。

井上正明

株式会社シーユーシー・ホスピス
代表取締役社長

金融業界からキャリアをスタートしたのち、ベビーシッター業界の草分けである株式会社ポピンズの副社長に。国や行政に働きかけながら規制緩和をリードし、業界の健全な発展に寄与した。2022年7月、ヘルスケア領域の課題を解決すべくCUCホスピスの代表取締役社長に。“希望が生き交う生活の場”を日本中に広める戦略を加速させている。

強みを重ねて挑戦を加速させる

吉田　井上さんが当社に参画されたのが2022年の7月。それまでは銀行から金融コンサル、保育事業の草分けであるポピンズというキャリアを重ねていますよね。

井上　はい。関連性がないように見えて「社会貢献」というテーマが通底しています。そのなかでも、ポピンズとCUCホスピスは特に親和性が高いと感じています。ポピンズは「働く女性を応援したい」という創業者の想いから生まれた事業ですが、創業当時は社会で活躍する女性が増えていたものの、育児や介護を支援する仕組みや制度が足りていませんでした。私はその状況を踏まえ、理念をぶらすことなく事業を拡大する役割を担いました。ポピンズの副社長に就任してからは、国や自治体に働きかけながら規制緩和を実現し、保育所を30カ所から360カ所まで増やすことができました。CUCホスピスも今、同じ状況にあると感じ、参画を決めました。

吉田　日本でホスピスという存在が知られていなかった時代に「必要なものがないなら自分でつくろう」と、“ホスピス型住宅”という看取りのビジネスモデルをつくったのが当社の原点。そこからがん末期をはじめ、ALS（筋萎縮性側索硬化症）やパーキンソン病など、少しずつケアができる病や障がいの間口を広げました。妊娠や出産を機に女性がキャリアを絶たれていた状況に対して、ポピンズが日本で初めてベビーシッターの養成や派遣に取り組み、その概念の浸透から奔走してきた姿と通じるものがありますね。

井上　CUCホスピスをこれまで育て上げてきた、看護師出身の吉田さんと、門外漢の私。異なる強みを重ねるからこそ、挑戦が加速すると確信しています。

CUCホスピスの挑戦を日本のすみずみまで広めたい

井上　諸外国に先駆けて超高齢化が進む日本では、死亡数が、2040年まで増加傾向にあり、ピーク時には年間約170万人が死亡するという予測があります。（厚生労働省　令和2年版厚生白書より）それにもかかわらず在宅でお看取りできる基盤は充分に整っているとはいえませんし、地域格差も見過ごせません。当社が事業を拡大するうえでは、こうした状況に応えるために自社が果たすべき役割を考えなければいけません。

吉田　そうですね。当社の施設を増やすという発想ではなく、地域のニーズに応える、不足している病床を増やす、という気概が必要。そこで暮らす方々に加え、医療に従事する方や行政の方にも「この地域には『ReHOPE』があるから大丈夫」と頼りにしていただけるような存在を目指したいですね。

井上　もっと言えば、地域にひとつ『ReHOPE』を置くことがゴールではありませんよね。地域に複数の施設を展開したうえで、NPO など業界を越えた多様な事業者と手を重ねる必要があります。なぜなら、私たちが理想とするご入居者さまの気持ちに寄り添うケアを届けるには、地域を包括するような影響力が欠かせないからです。

吉田　同じ地域に複数施設を展開すると、地域との関わりが増えることで客観的な視点で自社のサービスが検証されたり、評価されたりする機会が増え、私たちのサービスを磨くことができる。そして、地域の医療の底上げに貢献できる。最近、少しずつ複数施設を展開する地域が増えてきたなかで、大きな手応えを感じています。

井上　そうですね。そうして地域との関わりにおける成功実績を蓄積した先で、“希望が生き交う生活の場”を世界に広めていきたいですね。課題先進国である日本で研鑽を重ねたサービスは世界にも通用すると信じています。

『ReHOPE』の名の下
標準化を進化させる

井上　地域に寄り添いながら施設を増やしてきたなかで、拡大の基盤となる業務の標準化にも力を入れた１年でしたね。標準化というとドライな印象を与えるかもしれませんが、吉田さんの強い想いを起点にしながら事業を広げていくための鍵だと思うのです。スタッフの負担を軽減し、寄り添いの品質を保つ。ご入居者さまお一人お一人の個性を理解し、心身ともに必要なケアを届けることができる余裕を生む。そのための標準化です。

吉田　看護・介護の領域はスタッフの強い想いに依存し、サービスが属人化してしまう難しさをはらんでいます。これに対しご入居者さまお一人お一人が必要とするケアを見極めて届けるという本質から外れることなく標準化するというのが、私たちの挑戦です。たとえば施設運営とコンプライアンスの観点から作成した 19 のマニュアル。施設見学やご入居時の対応、障害福祉サービスの申請が各施設で行えるように、これからはさらなる浸透を目指していきたいと考えています。研修面では、ベテランスタッフの手際を撮影した動画がいつでも視聴できる仕組みを導入しましたね。

井上　今後は蓄積されてきた成功実績を言語化し、共有できる仕組みも作ります。AI などのテクノロジーを活用する選択もあるでしょうね。他方で、私が大きな手応えを感じているのがリブランディングの成果です。名称を『在宅ホスピス』から『ReHOPE』に変更したことが追い風になっていると感じます。

吉田　そうですね。一般的に“ホスピス”という言葉には“死を静かに待つ場所”というイメージがあります。でも、私たちが提供しているのは、重い病や障がいを抱えている方が最期の瞬間まで自分らしく前を向いて生きることのできる場。それが私たちが理想とする“ホスピス”であり、目指しているサービス。乖離をなくすための変更でしたが、早くも効果を実感しています。

井上　CUCホスピスの寄り添う姿勢も伝わりますよね。現場のスタッフにとっては道を示す旗印でもある。だからこそ標準化を進めるなかでも寄り添いの品質が保たれ、日々、希望が再生されていると感じます。

吉田　先日も、『ReHOPE』に込めた想いを象徴する出来事がありました。難病とされる慢性炎症性脱髄性多発神経炎を抱えていた方がいらっしゃったのですが、スタッフ一丸となってリハビリをサポートしつづけた結果、『ReHOPE』からご自宅に戻れるほどに身体機能を回復させることができたのです。末梢神経が炎症を起こし、筋力の低下や手足のしびれが起きる病気のため、『ReHOPE』にいらっしゃる前の病院では寝たきりで生活全般に介護を必要とされていました。しかし今では、車いすも使わず、ご自身の足で歩けるまでに回復されましたね。

井上　病を抱えるご本人さまやご家族だけでなく、医療や介護に従事する方々にとっても希望となる出来事だと思います。こうした実績も相まって、私たちのもとには多様な人材が集まる流れが生まれていますよね。

吉田　そうですね。さまざまな専門性をもつ人材が参画くださるようになりました。看護や介護といった専門性があれば十分という時代ではありませんから、異なる専門性の掛け算で従来にない取り組みを加速させ、解決が困難とされてきた日本社会や医療システムにまつわる課題に立ち向かっていけたらと思っています。

井上　当社では社員の声に耳を傾け、反映する努力を重ねているため、新しく入社する方も意見を発することができ、一人ひとりのもつ力が発揮されやすいと思います。社会を変革する意志のある多様な方々をお迎えし、挑戦を加速させましょう。

吉田　そして今後は、私たちの成功事例を医療機関や福祉施設、新規参入企業などに広めていきたいですね。

井上　同感です。電気やガス、水道のように、社会インフラになりえるビジネスモデルです。あらゆる可能性を見据えて挑戦しましょう。

History　CUCホスピスの歩み

2017

エムスリーナースサポート（現：CUCホスピス）を創業。また、難病ケアという特殊な領域において安心してケアできる人材を育てるために、クラーク養成所を立ち上げ。

M3 Nurse Support,Inc

2018

地域のニーズに応えるために、次々と新しいホスピス型住宅を展開。自社にてゼロから立ち上げるほか、連携する事業者との共同開発、M&Aなどさまざまな形態を実現。

2019

自分たちの看護・介護ケアのあるべき姿を見直すために「エピソードキャンバス」を開始。ケアやお看取りの価値を再認識し、伝承していくイベントに。

2021

複数夜勤体制を実現。ご入居者さまがもっとも不安を感じやすい夜間にお一人お一人の命をしっかり守ること、看護師・介護職にとってより働きやすい環境にすることを目指した。

2022

これまでCUCホスピスが人や施設別で培ってきた経験や強みを見直し、それらを全社に活かすために、知識やノウハウを標準化する取り組みをスタート。

2023

事業ブランドを「在宅ホスピス」から『ReHOPE』に変更。改めて、病とともに生きる人たちが「前を向いて」生きられるサービスを全国に広めていくという決意を込めた。

SUPPORTERS
INTERVIEW

テクノロジーが進化しても、最善のケアは、人にしかつくれない。

一般社団法人鳳雛会　代表理事
あらたホームクリニック三国ヶ丘　医師
山口一行さん

Profile

大阪・堺市出身。徳島大学で学んだ後に堺市の総合病院に勤務。がん患者をはじめとする、通院が難しくなった方を最期まで診たいという想いから訪問診療医として独立。ご入居者さまの気持ちを大切にするReHOPEの思想に共感し、1年ほど前から連携している。

「病や障がいを抱える方との向き合い方に正解はありません。しかし想像力を働かせながら、その方のために最善を尽くそうと努力しつづけることで、正解に近づくことはできる。」そう語るのは、ReHOPE 堺北を訪問診療医としてサポートしてくださっている山口一行先生。協業において印象的だったことを、お話しいただきました。

コロナ禍を経て変化した患者さんの想い

私は総合病院で、医師としてのキャリアをスタートさせました。多くを学び、やりがいも大きかったのですが、患者さんを最期まで診ることができないというもどかしさも感じていました。病状が進むと通院が難しくなるので、訪問診療クリニックを紹介する形となるからです。もともとそうした想いがあったなかで、地域で訪問診療クリニックが足りないと声をかけていただき、自分で開業しようと踏み切りました。働き始めた頃と現在を比較して感じるのは、どこで、どのように最期を迎えたいかという患者さんの想いに変化が見られることです。かつては病院で亡くなることが一般的だと思われていましたが、いまは自分らしく過ごせる環境で最期を迎えることに重きを置く方が増えたように思います。コロナ禍でご家族やご友人との面会が制限されたことも影響しているのでしょう。これは堺市に限ったことではなく、日本全国でみられる変化だと思います。だからこそ、お一人お一人の気持ちを大切にしながら前向きな最期を迎えることのできるReHOPEの必要性を、強く感じています。

看護師と介護職の緻密な連携

ReHOPE 堺北を初めて訪問したのは、1年ほど前。人工呼吸器に加えて、胃ろうやバルーンもつけている方の治療を依頼されてのことでした。こうした状況にある方を24時間体制の看護・介護サービスで支えることができるスタッフの能力に驚かされたのを覚えています。それを実現するために、多職種の方々がしっかり連携しているのも印象的でした。多くの施設では、看護と介護の専門性が異なるため、チームワークが難しい状況を見受けます。ReHOPEの強みは、医療の知見をもとに受け入れ方針を定め、その意思決定をもとに全職員が緻密に連携していることだと感じます。たとえば薬を投与した後の微細な数値の変化。医療の知見がないと見過ごしてしまいそうですが、ReHOPEの方々は的確に報告してくれます。このように、ご入居者さまお一人お一人をしっかり観察することは、情熱がないとできません。診察する私にとっても、ご本人やご家族にとっても大きな安心です。

寄り添う心が最善の看取りにつながる

ReHOPEに入居した方のなかには、数日で亡くなる方もいらっしゃいます。一見、なにもできなかったように映りますが、そうではないことがご本人やご家族の表情を見ていると伝わってきます。病院ではなく、自分が望む場所で過ごしながら最期を迎えられたことから、みなさん本当に穏やかな表情をされているのです。ReHOPEに数ヶ月や数年にわたり滞在される方も、入居したばかりの頃は不安そうにしていたものの、いまでは安心してくつろいでいて、まるで自宅にいるようにお好きなことを楽しみながら過ごされています。生き方や最期の迎え方に関するご要望は、人によって、状況によって異なります。そこに正解はありません。それに対し ReHOPE では、どのような希望をお持ちか、治療の方針も含めて日頃からしっかりと会話し、その想いに応えようとしている。それは技術と心の両方を持った人間にしかできないことで、どれだけテクノロジーが発達しても、AIを活用できるようになっても、代替できるものではないと感じます。ReHOPEのみなさんと接するたびに、この地域を一緒に支える身として、私も最善をつくしたいと感じるのです。

SUPPORTERS
INTERVIEW

前向きなお看取りは、地域の人々の希望となる。

特定非営利活動法人あたたかい心
理事長　岸田泰彦さん

Profile

あたたかい心を2002年に設立。高齢者・障がい者（障がい児）およびその家族をはじめとする方々に『日常生活上の支援活動（介護サービス・育児サービス・外出支援サービスをはじめとするさまざまな生活サポート事業）』を提供することに尽力している。

障がいがある当事者とそのご家族を支えてきた、特定非営利活動法人あたたかい心の理事長・岸田泰彦さん。CUCホスピスの取締役 Founder・吉田豊美とは20年にわたるつながりと協業の実績があり、“ホスピス型住宅”というモデルを形にする軌跡を見てきました。地域に寄り添い、一人でも多くの方がより良い人生を送れるよう尽力してきた岸田さんの立場から、“ホスピス型住宅”の存在価値や、CUCホスピスがこれから果たすべきことを語っていただきました。

20年前に驚かされた、“緩和ケアを行う住宅”という新たなモデル

あたたかい心は、長年、高齢者や障がいがある方お一人お一人が求めることを考え、型にはまらない介護や育児、日常生活のサポートを行ってきました。そんな私たちにとって、吉田さんが生み出した“ホスピス型住宅”は、ご本人やご家族が望む暮らしを実現するために欠かせない存在でした。20年前は、自宅のように慣れ親しんだ場所で、必要な医療・介護ケアを受けることができませんでした。重い病や障がいを抱える方は病院に入院するか介護施設で暮らすかという選択しかなく、特に介護施設は、病や障がいが進行した先にやむをえず退去しなければいけないこともあったのです。そうした状況に対し、看護師だった吉田さんが「あたりまえの日常を支える」「最期まで豊かに生きていただく」という想いで“ホスピス型住宅”をスタートされました。看護師や介護職が訪問する時間に限らず、日常に寄り添い、最期まで支える。吉田さんと障がいや難病を抱える方々のケアを行うなかで、いかに“ホスピス型住宅”が地域に不可欠な存在かを実感しました。

最期まで自分らしく生きられる場が日本中で求められている

この国はいま、地域医療の持続可能性について大きな問題を抱えています。 2040年頃までは高齢者が増えつづけ、国は膨らむ医療費の適正化を目指しています。病院も病床を減らすべく、医療行為の必要がない方はできるだけ退院していただく方針をとっています。しかし、核家族や共働き世帯が増えているだけでなく、地域における関わりも希薄化しているため、自宅では介護しきれないケースが増えているのです。この課題を解消するには、病院でも自宅でもない、重度の障がいや病がある方のケアに特化した場所が必要です。それもただ看取ればいいというわけではありません。この国を背負ってきたご高齢の方には、最期まで自分らしく生きてほしいと誰もが願っているはずです。ご本人も、おいしい食べ物を食べたり、好きな音楽を心ゆくまで聴いたり、豊かな暮らしをおくりたいはずです。その最たる選択肢が、CUCホスピスのサービス。お一人お一人の要望を叶える場所であり、ご家族のケア疲れをやわらげる場所でもある。悔いのない、前向きな看取りを実現する、地域医療を守る希望だと感じています。

一緒に声をあげ、日本の社会福祉を向上させたい

20年前と比較すると、病や障がいと生きる方の選択肢は増えてきたと感じます。しかし、充分とはいえません。当事者や近親者が本当に求める生き方を実現する手段がいまだ足りていませんし、サービスを提供する従事者の働き方にも改善の余地があります。理想は、誰もが人間らしく、自分らしく生きることのできる社会。そのためには、サービスを提供している人々が声をあげ、実態を周知する必要があります。なぜかというと、高齢者や障がいをもった方々は強く発信することができないからです。その方たちに対峙しつづけている私たちのような人間が代弁することで、現場の本当の負を社会に伝えられると確信しています。そして、このような発信活動はひとつの団体で成し遂げられることではありません。立場を超えてつながり、働きかける必要があります。だからこそ、私たちはCUCホスピスに大きな期待を寄せています。特定非営利活動法人という私たちとは異なる立場から、理想とする社会を一緒に実現していきたいです。

EPISODE
CANVAS
02

【 EPISODE CANVAS 】

「エピソードキャンバス」は、1年を通して「『前を向いて生きる』を支える。」を体現した取り組みを共有し合い、
もっとも共感を集めた施設を表彰するイベントです。 2023年度のグランプリに輝いたReHOPE 多治見のエピソードをご紹介します。

新たな目標は、紅葉を観る旅。

ReHOPE 多治見
Sさま（70代男性）　病名：慢性炎症性脱髄性多発神経炎

末梢神経に炎症が起こり、筋力の低下や感覚障がいが起きる慢性炎症性脱髄性多発神経炎。30年近くこの病気と闘ってきたSさまですが、入院先の病院からReHOPEに受け入れの打診をいただいたときは、すでにお身体に力が入らず、寝たきりの状態。栄養は鼻に挿入したチューブから。入退院を繰り返す可能性もあることを主治医から告げられました。「それでも大丈夫です」とお迎えした私たち。受け入れの方針を定めるためにSさまにご希望を尋ねると、朦朧としながらも「家に帰りたい」とお答えになりました。そこで、まずは鼻のチューブを外し、車いすに座れる状態を目指すことに。よだれが垂れ、意思に反して震える手足。それでも、リハビリを継続しました。最初はスタッフに動きを誘導されることが多かったSさまでしたが、少しずつ自分の意思で体に力を入れられるように。すると「できた！」「うれしい！」という感覚が湧いてきたそうです。そこから一つずつ目標を達成し、ついに自分の足で立ち、歩くことができるようになりました。自宅に戻れる可能性はほぼないと診断されていたにもかかわらず、Sさまは自宅に戻ることができました。歩行器を使い、自分の足で。あれから1年が経ちいまでは自分の足で紅葉を観に旅行することを目標にされています。

CHALLENGE | 01

どんな状況でも、
希望をふたたび生みだす。

重度の病や障がいをもつ方が、前を向いて、
その方らしく生きられるように。
日常において安心を届けるのはもちろんのこと、
病状の進行にともなう意思決定を支援すること、
喜びを見つけることにも一緒に取り組んでいます。

ご入居者さまへの約束

私たちが目指すのは、重度の病や障がいがあっても、自分らしく生きられる場所。

安心・安全

看護と介護の力であたりまえの日常を。

日本全国でがん末期や神経難病をはじめとするさまざまな病や障がいのケアを
行ってきた豊富な経験があります。看護師と介護職が力を合わせて支えることで、
医療という土台のうえで、安心できる暮らしを叶えます。

＜具体的な取り組み＞

・他では断られた方を受けとめる体制
・医療行為も含めた日常的なケア
・意思疎通が難しい方の日常を支える介護
・難病ケアに関する知識の社内共有

24 ページ

意思決定支援

心に寄り添い納得できる選択を。

「これからどうなるのだろう」という不安に寄り添い、今後の病状の変化も見据えながら、
知識と経験をもとに医療処置やケアの選択肢を示します。
そして、メリットやデメリットをご理解いただきながら、自分らしい決断をご支援します。

＜具体的な取り組み＞

・ご本人・ご家族との意思確認
・訪問診療医とともに行う治療・緩和ケア
・ご本人の心境に応じた方針変更
・ご家族へのグリーフケア

26 ページ

希望の実現

「やりたい」という想いに叶える方法を。

「さんまを食べたい」「富士山を見たい」といった日々の願いから、あきらめていた挑戦まで。
お一人お一人の「やりたい」に寄り添います。
そして、知恵を振り絞り、安全を守りながら、ご本人やご家族とともに実現していきます。

＜具体的な取り組み＞

「食べる」「挑戦する」「つながる」「四季を感じる」
という４つのキーワードを大切にしながら、
何かをやってみたいという想いがご入居者さまに
生まれたときに、最善の方法を提案します。

28 ページ

安心・安全

看護と介護の力であたりまえの日常を。

ReHOPEでは神経難病をはじめ、重い病や障がいをもつ方のケアができるように、
知識の蓄積や体制の強化を行ってきました。生きる困難を抱える方々に
間口を広げつづけるために、これからも挑戦を重ねていきます。

情熱に技術をかけあわせ、難病ケア・緩和ケアの質を高めていく。

「『前を向いて生きる』を支える。」という使命を掲げる私たちは、重い病や障がいと生きる方にその価値を届けることを目指してきました。そのため、ほかの施設では受け入れることが難しい病状の方たちこそ、支えるべきだと信じています。

たとえば創業時から力を入れてきたALS（筋萎縮性側索硬化症）やパーキンソン病、さらに脊髄小脳変性症やプリオン病といった、難病をもつ方にもご入居いただいています。このような方々が日常生活を送るためには、人工呼吸器などの医療機器を扱うことなど、高度なケア技術が求められます。輸血、麻薬管理、胸水・肺水の対応をはじめ、医療処置も必要です。また、意思疎通が難しい方の日常を支える介護を提供するためには、高度なコミュニケーションスキルも要します。お一人お一人の顔をしっかりと見ながら気持ちを汲み取る、僅かな反応も見逃さないなどの工夫が肝心です。

難病患者は患者数が少ないため、経験を蓄積するのが難しい領域と言われます。しかし、私たちの基本的なスタンスは「できる方法」を探ること。たとえ経験のない症例に向き合うケースでも、主治医からの情報を受けて病態を理解したり、リスクを把握したりしながら、過去に似たような受け入れ経験があったかを探ります。創業より蓄積してきた情報を土台に、チームで創意工夫をしながらケアを届けます。このような取り組みの結果、私たちが対応できる症例が増えていくのです。

現場における対応力を支えるのが、知識や経験が豊富なマネジメント層やスペシャリストの存在。現場で培ってきたノウハウをマニュアルや動画などで共有できる体制づくりも推進しており、ひとつの施設で受け入れた方を、全施設の知見を活かしながらサポートできるように努力しています。これからも、進化をつづけることが欠かせません。訪問診療医との密な連携をはじめ、すでに実施している外部の専門家を招いての勉強会などは、いっそう注力したい考えです。情熱を持った人がしっかり連携し、技術を補完しあえる関係性を築いていきます。

また、こうした難病ケアを実現するために、私たちの理念に共感してくれる人材を採用することを大切にしています。難病ケアの経験をもつ方は医療・介護現場において少ないため、入社時や施設立ち上げ時の研修を手厚く実施します。1週間ほどかけて、難病との向き合い方をシミュレーション形式で学んだり、現場で必要となる知識や心構えを習得したりするプログラムです。また、課題をひとりで抱え込まないためのチームビルディング、ご入居者さまがご逝去された後のバーンアウトをケアするフォローアップ体制も構築するなど、全社における仕組みづくりにも注力しています。

世の中にはケアを受けられず、困っている方がまだたくさんいらっしゃいます。これからも強い信念をもって、ひとりでも多くの方にケアを届けられるように努力を重ねたいです。

株式会社シーユーシー・ホスピス
運営部長　藪 康人

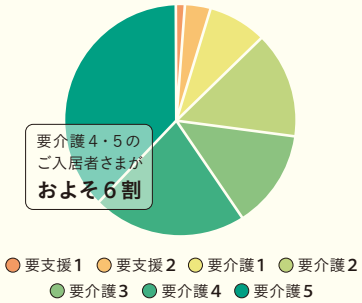
ひとりでも多くの方を受け入れることを目指して。

1,037 名
※2023年3月期

2023年3月期に新しくお迎えしたご入居者さまの数です。お一人お一人のご状態やお気持ちと向き合い、最適なケアを模索しました。

生きる困難を抱える方々に間口をひろげつづける。

ご入居者さまのおよそ6割は要介護4または5の認定を受けています。今後も、他の施設では受け入れが難しい方々も安心して暮らせるように尽力します。



※2023年3月末時点

受け入れ実績のある疾病等

※創業から2023年3月末まで　※施設によって対応経験が異なります

- 多発性硬化症
- 重症筋無力症
- スモン
- ALS（筋萎縮性側索硬化症）
- 脊髄小脳変性症
- ハンチントン病
- 進行性筋ジストロフィー症
- パーキンソン病関連疾患
- 多系統萎縮症
- プリオン病
- 脊髄性筋萎縮症
- 球脊髄性筋萎縮症
- 慢性炎症性脱髄性多発神経炎
- 後天性免疫不全症候群
- 頸髄損傷
- 末期の悪性腫瘍
- 人工呼吸器を使用している状態

対応可能な処置

※創業から2023年3月末まで　※施設によって対応経験が異なります

在宅酸素／人工呼吸器／NPPV（バイパップなど）／TPPV／気管切開／中心静脈栄養（ポート・カテーテル）／静脈点滴／皮下点滴／経管栄養（胃ろう・経鼻・腸ろう・経皮経食道胃管）／血糖チェック／インスリン注射／人工肛門／腎ろう／膀胱ろう／小腸ろう／導尿／膀胱留置カテーテル／膀胱洗浄／持続膀胱洗浄／褥瘡処置／創傷処置／麻薬管理／疼痛管理／神経ブロック／感染症／MRSA／C型肝炎／B型肝炎／梅毒／HIV／結核（排菌なし）／ドレナージ／腹水／胸水

意思決定支援

心に寄り添い納得できる選択を。

重度の病・障がいとの向き合い方や治療方針に、正解はありません。
ReHOPEではご入居前からご本人やご家族の希望を理解し、選択肢を示しながら、
その方が本当に望む生き方を一緒に実現していきます。

ご本人、ご家族と対話を重ね 悔いのない意思決定を支える。

同じ病気や障がいがある方でも、お一人お一人の病状や進行のスピードは異なります。そして、どのような生活を送りたいか、どのような最期を迎えたいかという希望も、当然ながらさまざまです。そのため、私たちはご入居者さまの病気や障がいにまつわる基礎知識をもったうえで、ご本人の心に寄り添い、本当に求められていることをともに考えていきます。

ご入居者さまの心境や希望を理解することは、入居の前からはじまります。まず、ご本人やご家族が主治医から得ている疾患にまつわる情報をおうかがいし、ご理解や納得が充分でないと判断したら、改めてご説明いただけるよう働きかけます。ご家族と会話を重ねることも欠かせません。対面、お電話、メールでもご本人が希望する生き方や最期の迎え方をうかがい、入居後にどのような生活を送れそうかを共有することで、ご本人もご家族も安心してお越しいただく準備をします。また、ReHOPEに入居されたあとにご本人が希望する生活を叶えるためには、経済的な課題を乗り越える必要がある場合も。年金収入などを確認し、生活保護の申請にまつわる情報を提供するなど、お力になれることを模索します。

入居後の大きな意思決定として、治療を希望するか、しないかがあります。希望される場合は体力を養う必要があるので、医師に相談しながらどのようなお食事を、どのようにとるかを確認し、いつから治療を開始するかを一緒に判断します。しかし難しいのは、ご本人ではなくご家族の強い希望で治療を継続している場合です。治療やケアへの意思が変わったり、本音を口に出せなかったりするのはよくあること。治療後のご様子を観察したり、会話から心境を汲み取ったり。小さな変化も見過ごすことがないようにし、必要に応じてご家族との橋渡しを行います。治療を希望されない場合は、緩和ケアに集中。辛い症状が出たときにすぐにお呼び出しいただける関係性を築いて、迅速に、適切に対応できるように備えます。

意思決定にあたってもっとも大切にしているのは、ご本人やご家族が必要とする時間をかけること。対話の時間を惜しまず、私たちがもっている情報を共有しながら、納得が生まれるまで考えていただきます。

ご本人の最期が近づくにつれ、次第に精神面でのケアが必要になるのはご家族です。愛する人の病状が進行するのを見るのは、当然ながら辛いことですよね。少しでも理解を促進できるように、ご本人が置かれている状況や、次に起こることについて丁寧に共有します。そして、最期が近づいたときには速やかにご連絡し、悔いのないお別れを実現できるように全力を尽くします。

ご本人の想いを最期まで尊重するには、ケアにあたる私たちのチームワークが大切。どれほど小さなことでも毎日お互いに共有し、チームで判断して動きます。正解がないなかでも、ご本人やご家族が納得できる意思決定を実現するために、欠かせないことです。

ReHOPE 東戸塚
看護管理者
西山 貴子

私たちが意思決定を支援する流れ

1 意思の確認 → **2 治療・緩和ケア** → **3 方針の変更**

ご本人やご家族の病状への理解、希望する生き方・最期の迎え方を確認したうえで、治療や緩和ケアの選択肢を探り、意思決定を支援します。入居時に方針を決定できていない場合、主治医から再度病状をご説明いただき、状態変化時の対応をご家族と決定します。

治療を希望される場合は、医師と相談しながらとるべきお食事や治療時期に関して確認と判断をします。治療を希望されない場合は、辛い症状が出たときに迅速に、適切に対応できるようにチームで備えます。

治療や緩和ケアの方針を一度決めた場合でも、ご本人の心境が変わることもあります。心の揺れに気づき、寄り添い、必要に応じてご本人やご家族の橋渡しをしながら、悔いのない治療や緩和ケアの方針を実現します。

Yさん ｜ 想いを叶えるために、ご家族の理解を促す

ALS（筋萎縮性側索硬化症）を発症された50代の女性。ご本人の治療を継続したくないという意思を、ご家族は受けとめることができませんでした。特にお父さまは新聞で見た治療方法を看護師に提示するなど、なんとか可能性を探ろうとしていたのです。私たちはお父さまの心に寄り添いながらも「その治療方法は娘さんの病気にあてはまらないです」「娘さんは、頑張って闘っているんですよ」とお伝えし、選択を尊重いただく働きかけを行いました。理解してくださったお父さまは、娘さんに「最期まで本当に頑張った」とお言葉をかけられました。

Aさん ｜ 言葉にできない想いを察し、背中を押す

口腔がんを患い、頬に目立つ腫瘍があった男性。前の施設では、腫瘍から出血する可能性や体力の低下もあり、ベッドで横になりおひとりで食事をとっていました。しかし、ReHOPE では「座って食べたい」とおっしゃったのです。引きつづきベッドで食事をとることにご本人は納得されていましたが、寂しさは伝わってきました。そこで私たちは、食堂で食べられないかと考えました。その10日後には食べられなくなってしまったものの、最後に座って食事をしたいというご本人の希望に沿うことを実現。ReHOPE に移られて「生きる喜びにつながった」というお声もいただきました。

希望の実現

「やりたい」という想いに叶える方法を。

好きなものを食べていただく。ご家族やペットと過ごしていただく。
季節を存分に味わっていただく。そんなお一人お一人が希望する日常を叶えるために、
私たちスタッフはどう寄り添うべきか、探求しつづけています。

「ここは施設ではなく、自宅」だから思うままに生きていただきたい。

何かをやってみたいという想いは、どのような状況でも消えることはありません。病気や障がいが進行しても、好きなものを食べたいし、お出かけもしたい。愛する人やペットに囲まれたり、季節を感じたりしながら過ごしたい。しかし医療・介護施設は集団で暮らす場所であるため、できること、できないことが生まれてしまうのが現実です。

ReHOPEで働く私たちが心がけているのは「ここは施設ではなく自宅」だということ。ご入居者さまの生活空間に私たちがお邪魔しているという考えのもと、ReHOPEで過ごす時間を家での暮らしになるべく近づけることを目指しています。そのため、何かをやってみたいという想いが生まれたときは、「それはできません」と否定することはしません。ご本人の安全、周囲のご入居者さまに配慮しながら、「どうすれば叶えられるか」と前向きに考え、最善の方法を模索します。

ご入居者さまの「希望」はさまざまです。たとえば、私たち人間の基本的な欲求といえば「食」。飲み込む力が低下しながらも「口からお食事をしたい」と希望されたご入居者さまには、誤嚥のリスクに備えて吸引器をそばに置きながら、普通食をできる限りお召しあがりいただくサポートをしています。また、もう少し大きな「挑戦」を望む方もいます。バラがお好きなご入居者さまに、バラ園でのお散歩をご提案。当日はご本人やご家族が安心して出かけられるように、私たちは黒子のように後ろをついて歩きました。このように、大小問わず、さまざまな「やりたい」と日々向き合い、叶えることに努めています。

ご入居者さまのなかで、すぐにやりたいことを打ち明けてくださる方がいる一方で、周りに迷惑をかけないように我慢してしまう方もいらっしゃいます。そんな方とは、普段から会話をしながら趣味趣向などをおうかがいしていくことが多いです。そこから発想が広がり、「こんなことができると思いますが、いかがでしょうか？」とご提案をすることも。

お一人お一人の何かをやってみたいというお気持ちと向き合うことができるのは「叶えたい」という想いをもつスタッフがいるからです。決して相手に押しつけず、ご本人の意思が働く瞬間に寄り添います。また、私たちが所属する施設を越えて、日本中であらゆる希望と向き合うReHOPEのスタッフがいます。お互いの取り組みから学びあえることは、大きな強みです。たとえば、ご夫婦で入居したいというご要望を私たちの施設宛にいただいたときに、ちょうど、他の施設でも母娘の受け入れをしたという事例を聞きました。ほかのスタッフの挑戦を聞くと、ノウハウを活かせるのはもちろん、「私たちもできるかもしれない」と前向きにやってみることができるのです。

「前を向いて生きたい」という想いを抱く、ひとりでも多くの方にReHOPEを選んでいただけるように。これからも「希望」を叶えることに尽力しつづけます。

ReHOPE 秦野
看護管理者
安部 理恵

希望を生み出す、私たちの4つのキーワード。

1 「食べる」

お食事は、その人らしく生きるうえでとても大切なことです。医師とも連携し、なるべく食べたいものを楽しく召し上がっていただきたい。飲み込みが難しくなった方には、お食事の形態を変えたり、食材の香りを味わっていただいたりと、さまざまな工夫をしています。お酒やタバコも、ここではあきらめなくても大丈夫です。

2 「挑戦する」

絵を描きたい、お着替えやメイクをしたい、お買い物をしたい、旅行にでかけたい…挑戦したいことや楽しみがあること、それは生きがいにつながります。その実現に向けてリハビリを支援するほか、テクノロジーを活用して思い出の場所へ赴いていただくなど、ご希望に添えるよう尽くします。

3 「つながる」

家族や大切な人、ペットとも面会したいという想いを尊重し、実現しています。家族団欒でのお食事やお誕生日会、リモートでの会話もできるようサポートしていきます。地域の人々と交流できるイベントも開催。閉ざされてしまいがちな場所だからこそ、より多くの人に、地域にひらいていきます。

4 「四季を感じる」

「来年の桜は見られるかな」「みんなでお正月を祝いたい」ここでは、よく聞く会話です。うつりゆく季節を感じることは、生きている実感でもあります。季節にあわせたお食事やお祝いごとをしたり、室内からでも自然を感じていただける飾りつけをしたり。四季を心ゆくまで楽しんでいただけるように工夫しています。

CHALLENGE 02

社会の期待に応える、組織をつくる。

ご入居者さまやご家族に前を向いて生きていただくために
欠かせないのが、スタッフの存在です。
生きがいと働きがいを実感しながら
社会の期待に応えられるように、
一人ひとりを後押しする組織づくりに取り組んでいます。

病・障がいと向き合う意思がある人材を積極的に採用。

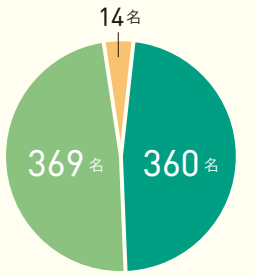
がん末期や障がいを抱える方に対するケアは、難易度が高いもの。そんなケアに向き合おうという意思をお持ちの方を、チームに迎え入れています。

全従業員数
※2023年3月末時点
957 名

2023年3月期の合計採用人数
※2023年3月期
475 名

看護と介護が手をとりあいケアを届ける。

看護師や介護職、セラピストが施設内で密に連携し、お互いの専門性を活かし合いながらご入居者さまへのケアにあたっています。

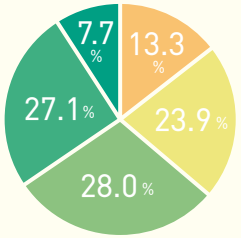


●看護師 ●介護職 ●セラピスト
※2023年3月末時点

多彩な人材が強みを掛け算し、活躍できる現場へ。

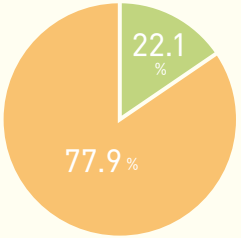
幅広いキャリア・経験をもつスタッフを受け入れ、それぞれの実力にふさわしい活躍の場をつくっています。また、多くの女性スタッフが活き活きと働く現場を実現しています。

スタッフの年齢分布



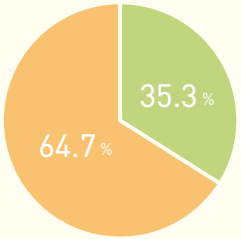
●20代 ●30代 ●40代 ●50代 ●60代以上
※2023年3月末時点

スタッフの男女比



●女性 ●男性
※2023年3月末時点

管理職の男女比



●女性管理職 ●男性管理職
※2023年3月末時点

専門性を磨く場をつくり、ReHOPEの集合知を高めていく。

新入社員に向けてご入居者さまへのケアや自社の理念にまつわる充実した研修を実施しているほか、マネジメント研修、資格取得支援など、学ぶ機会を年々進化させています。

新入社員を対象に実施した合計研修時間
※2023年3月期
のべ 78,592 時間

年間の研修回数
63 回
※2023年3月期

マネジメント研修参加者数
のべ 128 名
※2023年3月期

ご入居者さまを支える力は、働くスタッフの充実感から生まれる。

CUCホスピスの人事部が掲げるビジョンは「ReHOPEのすべての場を働きがいがある職場にする」こと。
職種問わず、すべてのスタッフが充実して働ける環境をつくることが、
その先にいるご入居者さまやご家族、地域や社会にお届けする価値を高めると考えています。

現場の声に寄り添い、進化し続ける組織でありたい。

「ReHOPEのすべての場を働きがいがある職場にする」。このビジョンには、ReHOPEのサービスの根幹にある「人」が充実感をもって働けるように、徹底的に寄り添うという決意が込められています。

私たちが提供するのは、ご入居者さまの日々の変化や望みを読み取り、願いを叶えていく「人対人」のサービスです。がんや難病で傷ついたご入居者さまを支え、もう一度前を向いていただけるかどうかは、スタッフのふるまいにかかっています。一人ひとりが安心して働き、学びつづけられる環境をつくることで、スタッフ自身の成長意欲が高まり、仕事の質が向上する。一人ひとりの仕事の質が高まることで、チーム全体が成長し、ご入居者さまに届けられる価値が高まると私は信じています。だからこそ、働くスタッフの気持ちに寄り添い、「入社前」と「入社後」の双方のタイミングで不安や不満を解消することに努めています。

採用のシーンで心がけたのは、ReHOPEにまつわる正しい情報を伝えることでした。一般的にホスピスと聞くと、「穏やかな時間が流れる場所」というイメージをもつ人が多いと思います。しかし、ReHOPEで働く看護師や介護職は1日に10件を超える訪問をする忙しい毎日を送っているのです。こうしたギャップは、入社後の不満につながりかねません。そこで、ギャップにつながりそうな部分を洗い出し、採用メディアや転職エージェントを通じて的確な情報を発信。さらに入社前にReHOPEの働き方を体感できる「見学会」を始めました。

入社後はスタッフの声を聴くことに重点を置き、月次で職場サーベイ「Voice」を実施しています。「仕事に満足しているか」「職場の人間関係は良好か」「よく眠れているか」といった項目に加え、働き方や職場における不満や不安があれば申告できるようにしています。その結果を受けて、必要に応じて面談を実施したり、全社で改善できそうな課題が見つかった場合は、人事施策に反映したりしています。スタッフの声を受け、2023年4月にスタートしたのが、新人事制度の「Forward」。Voiceを通して「まとまった休みがとれない」「成長したいが教育プログラムが乏しい」「頑張っても昇給がなく報われない」といった率直な意見が挙げられました。そこで、スタッフが心身ともに健康な状態で長く、スキルを高めつづけられる環境を整えることを目指し、等級制度や給与制度の見直し、教育プログラムの拡充、心身のケアに充てられる手当や休暇の導入などを行いました。

医療依存度が高い方をケアするReHOPEのスタッフには、多方面から大きなプレッシャーがかかります。だからこそ、安心と働きがいを感じていただける場をつくりたい。今後もスタッフの声に耳を傾け、強い人材、強い組織づくりを目指してまいります。

株式会社シーユーシー・ホスピス
人事部 部長
鎌苅 亮介

働きがい

専門職としての成長を応援し
日頃の頑張りに光をあてる。

現場とともに開発した人事制度

現場経験が豊富な看護師や介護職が監修した「スキルアップチェックシート」を策定。日々の育成や昇給の判断に活用し、CUC ホスピスで長く働き、成長することが報酬のアップにつながる仕組みを導入しました。

チームとの効果的な対話を促す研修

忙しいなかでも円滑に仕事を進めるために、他者を尊重したうえで意見を率直に伝える方法を学ぶ「アサーティブコミュニケーション研修」を全スタッフの必須研修にしました。

理念に沿った行動を賞賛する「Flower 表彰」

理念の体現や、体現に向けた努力を毎月表彰し、そのエピソードを社内報で紹介。受賞者には、ご入居者さまやチームと喜びを共有できる副賞「旬のフルーツ」も進呈しています。

働きやすさ

一人ひとりを尊重し
働きやすさと心身の健康を支える。

継続休暇を後押しする「こころみる休暇」

心を休める機会として、有給を３日連続で取得した際に１万円を付与する仕組みを導入。施設内でお互いに協力しあい、１年に１度の取得を目指しています。

心身の健康を支える補助

体の疲れの軽減や、健康診断のオプションに活用できる健康補助費として5,000円 / 年を付与。また、脳と心の休息に効果的と言われているマインドフルネスをオンラインで受けられるプログラムを希望者に向け導入しました。

あらゆる悩みを相談できる窓口の設置

働くうえで困りごとが発生した際に速やかに相談できる窓口を複数設置。「内部通報窓口」「産業医面談」「キャリア相談」など内容ごとに切り分け、適切な対応につなげています。

EPISODE
CANVAS
03

【 EPISODE CANVAS 】

「エピソードキャンバス」は、1年を通して「『前を向いて生きる』を支える。」を体現した取り組みを共有し合い、もっとも共感を集めた施設を表彰するイベントです。 2023年度のReHOPE 秦野のエピソードをご紹介します。

最後に、
アイスクリームを食べたい。

ReHOPE 秦野
Mさま（80代男性）　病名：パーキンソン病

病状が進行し、徐々にお身体の自由がきかなくなってしまったMさま。ご自身の状態を受け入れることができず、もどかしさがこみあげ、スタッフに大声で怒鳴ります。ときには、ケアを完全に拒否されることも。快くケアを受けていただくために私たちは何ができるのでしょうか。ケアを拒否される理由を、チームで何度も話し合いました。私たちが気づいたのは、スタッフの間で介助の方法に差があること。たとえばおむつ交換ひとつをとっても、当て方が少し違うだけで漏れてしまい、Mさまの不快感につながっていると気づいたのです。情報共有を徹底してケアの方法を統一したところ、ご本人が怒鳴ることも減っていきました。そして、少しずつ距離を縮めることができ、Mさまから徐々に本音を言っていただけるようになったのです。特にお好きなものが食べられなくなる不安をお話しいただき、「死ぬ前にアイスクリームが食べたい」と打ち明けてくださいました。そこでアイスクリームを少しでもおいしく、長く味わっていただけるように、スプーンで小さくすくって凍らせて、一つひとつをお召し上がりいただけるよう工夫しました。アイスクリームを口にしたMさまが、目に涙を浮かべながら喜ばれたことが忘れられません。「ありがとう、うれしいよ。」何度もチームで本気で話しあい、Mさまとの関係性を構築できたこと、喜んでいただいたことが、私たちの自信になりました。どんなに対応が難しい方だとしても、相手の想いを理解し真摯に向き合いつづけることで、いずれは受けとめてくださるということが分かったのです。今後もスタッフ一丸となって、ご入居者さまの希望に応えていきます。

HOPE FOR THE FUTURE

私たちがつくりたい「希望がふたたび生まれる場」

“ 治療法がなく、人生のどん底に
いると感じている方でも、
看護の力で前を向いていただき、
「**生きていて良かった**」と
感じていただける場に。”

ReHOPE 東戸塚　看護師　柴田 明子

“ 工夫を凝らしたReHOPEのお祭りでは、
普段より明るい笑顔が踊っている。
そんな**誇れる仕事**を、これからも。”

ReHOPE 仙台青葉 介護職　千葉 栄子

“ 一日の限られた時間のなかでも、
ご入居者さまに最適なリハビリを届けたい。
そのために、私たちセラピストも、
得意分野を磨きつづける。”

セラピスト　石原 実幸

“ 食の価値は無限大。おいしさを通して、
ご入居者さまの**人生をもっと明るく。**”

経営企画部　相馬 知佳

“ ご入居者さまが笑顔で過ごせる、
そしてスタッフが活き活きと
働ける**空間づくり**を。”

開発部　本宮 奈々

“ **ReHOPE を「隔離された施設」にしたくない。**
地域のさまざまな人とつながり、
難病ケアを高めあう関係性を築いていく。”

ReHOPE 駿河西 看護管理者 兼
看護介護支援室　畑中 久仁子

“ スタッフみんなで知識を高められるように、
専門性を養う機会をつくりつづける。”

ReHOPE 多治見
施設長 兼 看護介護支援室　看護･介護 SV
倉嶋 美枝

“ ご入居者さまを心おきなく
支えられるように、
スタッフを全力で後押ししたい。”

総務部 施設総務チーム　入吉 満夫

“ 施設長になっても、スタッフとともに
ご入居者さまの好きなこと、楽しいことを
一緒に探す姿勢も忘れずに。”

看護介護支援室 介護 SV　辻井 暢子

“ スタッフの素晴らしい取り組みに
光があたる組織でありたい。”

人事部 企画チーム　太田 慶

“ 誰にでも訪れる「老い」「病」「死」。
目をそらさず、正面から真摯に向き合うことで、
何気ない日常や愛する人の大切さに気づける。
ReHOPE はきっと「**生きることの本質**」を
教えてくれる場だと思う。”

ReHOPE 保土ヶ谷 看護師 兼 運営部
看護介護支援室（エキスパートナース緩和ケア）　須貝 淑子

“ 若くて障がいをお持ちの方も、
私たちが障害福祉サービスを展開することで
安心して生活できる場となるように。
障がいがあっても、病気になっても、
選んだ場所で「**自分らしく**」**生きられる社会**へ。”

運営部 運営企画チーム　羽田 有美

Our Philosophy | 私たちの理念

— Mission　私たちの使命

「前を向いて生きる」を支える。

— Vision　私たちが描く未来

どんな生きるにも向き合い、
「希望が生き交う生活の場」を
日本へ、世界へ、広めていく。

— Value　私たちが提供する価値

ご入居者さまと大切な方の
「かけがえのない人生の時間」を
最大限に活かします。

— Way　私たちの歩み方・行動規範

1. 「自分の立場」ではなく「ご入居者さまの気持ち」で考える。
2. 「できない理由」ではなく「できる方法」を探して実行する。
3. 「既成概念」にとらわれず「理想」を追求する。
4. 「専門性」の前に「人間性」を重視する。
5. 「上下」ではなく「ひとつのチーム」として手を重ねる。

らしく生きる、
スナップショット

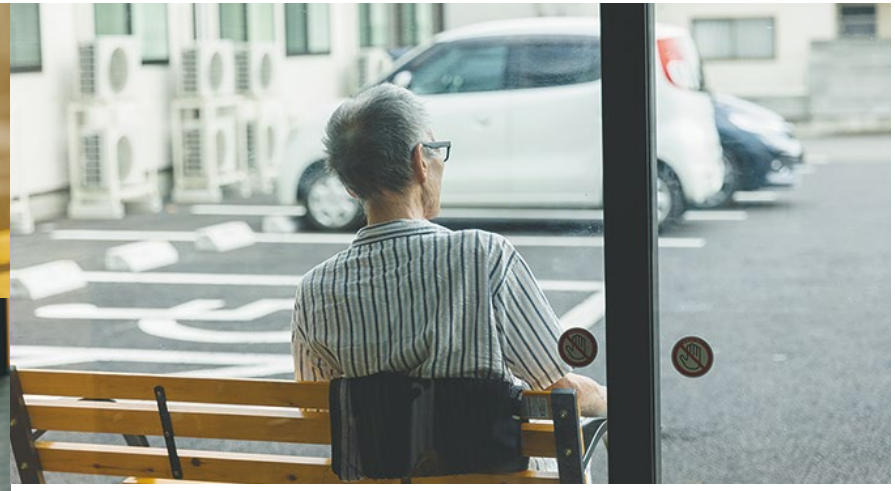
ReHOPEで過ごす時間がその方らしく、
悔いないものとなるように。
心から望むことを引き出し、
チーム一丸となって叶えていきます。

秋に控えているお嬢様の結婚式。
「挙式当日の状態は予測できないから、
いまこの瞬間の笑顔を写真におさめたい」。

治らないと思っていた足の疾患。
リハビリをしたら歩けるように！
いまは施設の周辺を散歩するのが日課。
歩いてご自宅に帰るという目標もできました。

夏といえば、お祭り。お面に、射的に、かき氷。
大好きなお酒だって味わいます。

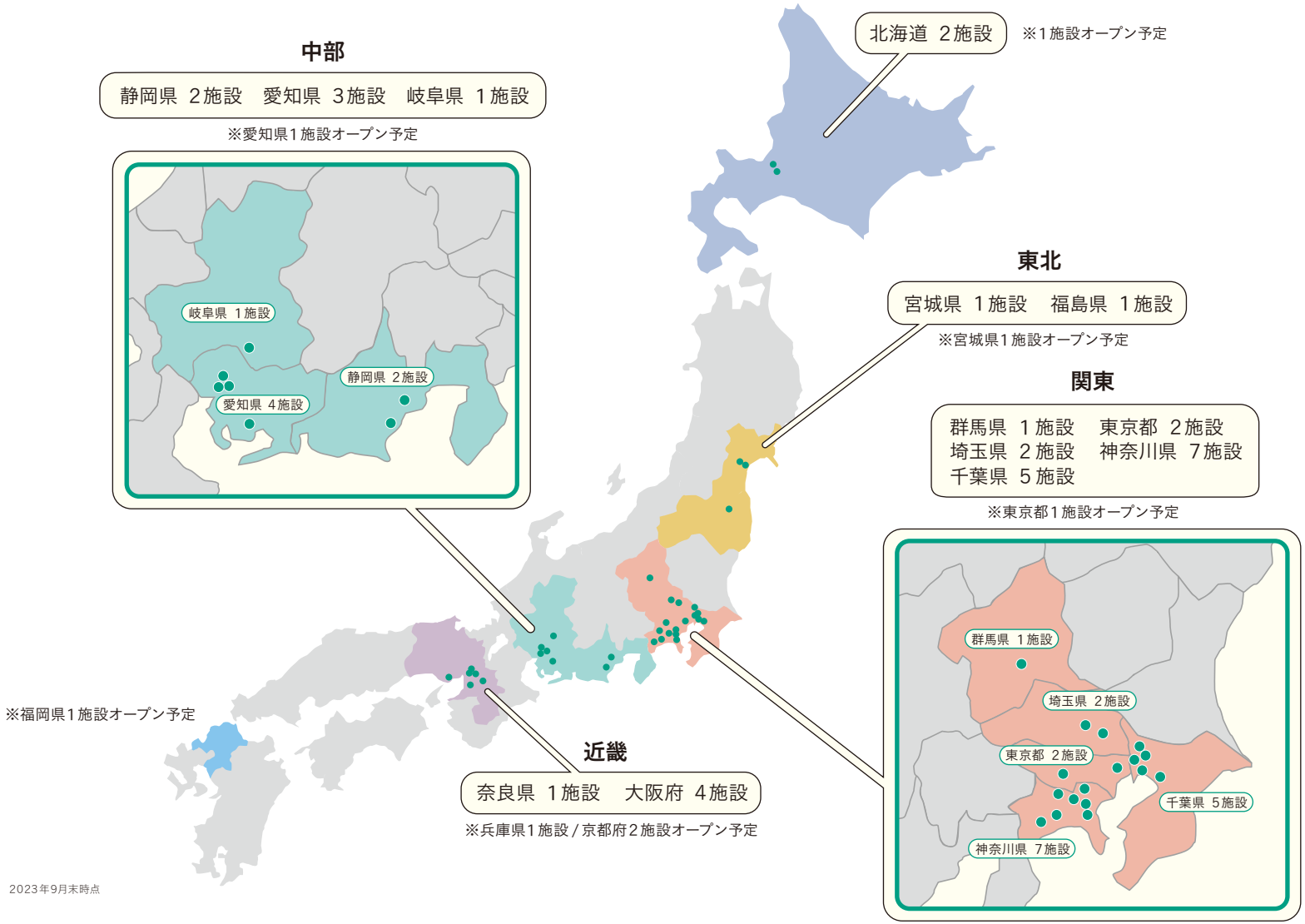
花が大好きでお部屋を花柄のもので飾ったり、お花の図鑑を眺めたり。
ご本人の笑顔も明るく咲きほこります。



周りの方にも配慮しながら、一服で安らぐ。最期まで大好きなタバコを
吸えることが、この施設をお選びくださった理由だそうです。

LOCATIONS
施設情報

日本中に、ReHOPEを広めていく。



2023年9月末時点

北海道

・ReHOPE 札幌厚別
北海道札幌市厚別区厚別西４条２丁目12-21

・ReHOPE 札幌北
北海道札幌市東区北32条東１丁目６-10

北海道札幌市 新施設（2024年2月オープン予定）

宮城県

・ReHOPE 仙台青葉
宮城県仙台市青葉区八幡３丁目11-11

・ReHOPE 仙台若林
宮城県仙台市若林区遠見塚東１丁目13
（2023年12月オープン予定）

福島県

・ReHOPE 郡山
福島県郡山市並木３丁目６-2

群馬県

・ReHOPE 高崎
群馬県高崎市福島町 773-4

埼玉県

・西上尾ホスピスケアそよ風（看護クラーク西上尾）
埼玉県上尾市上野 55-2

・ReHOPE 浦和美園
埼玉県さいたま市緑区美園１丁目36-28

千葉県

・マザアス在宅ホスピス南柏（看護クラーク南柏）
千葉県流山市向小金２丁目432
マザアスケアセンター南柏２･３階

・グッドタイムホーム･新検見川（看護クラーク新検見川）
千葉県千葉市花見川区畑町 472-7

・ラプレ西船橋（看護クラーク西船橋）
千葉県船橋市西船７丁目８-2

・ReHOPE 柏南増尾（施設名称：在宅ホスピス柏南増尾）
千葉県柏市南増尾１丁目14-11

・ReHOPE 松戸
千葉県松戸市南花島４丁目61-1

東京

・ReHOPE 墨田
東京都墨田区立花１丁目34-1

・ReHOPE 町田相原
東京都町田市相原町 1242-3

東京都町田市 新施設（2024年4月オープン予定）

神奈川県

・ReHOPE 秦野
神奈川県秦野市富士見町２丁目２

・ReHOPE 保土ヶ谷
神奈川県横浜市保土ヶ谷区東川島町 16-10

・イリーゼさぎぬま･新館（看護クラーク鷺沼等）
神奈川県川崎市宮前区土橋４丁目８-2

・ReHOPE 伊勢原
神奈川県伊勢原市桜台１丁目２-13
伊勢原駅前クリニック２･３階

・ネクサスコート橋本（看護クラーク橋本）
神奈川県相模原市緑区西橋本１丁目４-8

・ReHOPE 東戸塚
神奈川県横浜市戸塚区川上町 84-1
社会福祉法人ゆうあい会 ３階フロア

・アシステッドナーシング輝の杜（看護クラーク横浜瀬谷）
神奈川県横浜市瀬谷区五貫目町 10-38

静岡県

・ReHOPE 静岡葵
静岡県静岡市葵区瀬名１丁目11-3

・ReHOPE 駿河西
静岡県焼津市中根新田 1315

愛知県

・ReHOPE 新栄西館
愛知県名古屋市中区新栄２丁目37-20

・ReHOPE 新栄東館
愛知県名古屋市中区新栄２丁目43-26

・ReHOPE 星ケ丘
愛知県名古屋市千種区桜が丘113

・ReHOPE 岡崎
愛知県岡崎市明大寺町字仲ケ入 29-1
（2023年11月オープン予定）

岐阜県

・ReHOPE 多治見
岐阜県多治見市音羽町２丁目 56-3

京都府

京都府京都市南区 新施設
（2024年６月オープン予定）

京都府京都市右京区 新施設
（2024年12月オープン予定）

奈良県

・ReHOPE 奈良
奈良県奈良市大森町 148番

大阪府

・ReHOPE 堺北
大阪府堺市北区黒土町 41-1

・ReHOPE 吹田（施設名称：在宅ホスピス吹田）
大阪府吹田市岸部南２丁目26-3

・ReHOPE 御殿山北館
大阪府枚方市御殿山町 16-4

・ReHOPE 御殿山南館
大阪府枚方市御殿山町 14-21

兵庫県

・ReHOPE 神戸
兵庫県神戸市兵庫区材木町１丁目10
（2023年12月オープン予定）

福岡県

福岡県福岡市 新施設（2024年5月オープン予定）

MANAGEMENT STRUCTURE
マネジメント体制

代表取締役会長
濵口 慶太

株式会社シーユーシー創業者
兼 代表取締役

代表取締役社長
井上 正明

2022年 株式会社シーユーシー・ホスピス入社
同年より同社の代表取締役社長に就任

取締役 Founder
吉田 豊美

2017年 株式会社シーユーシー・ホスピスの前身であるエムスリーナースサポート株式会社を創業。同年に代表取締役就任
2022年 取締役Founderに就任

取締役
桶谷 主税

株式会社シーユーシー取締役
兼 管理本部本部長

運営部長
藪 康人

2018年 株式会社シーユーシー入社
2019年 株式会社シーユーシー 病院企画部長就任
その後、東海地区の新病院開発プロジェクト等を担当
2023年 株式会社シーユーシー・ホスピス
運営部長就任

人事部長
鎌苅 亮介

2018年 株式会社シーユーシー入社
2018年 株式会社シーユーシー 人事部長就任
2022年 株式会社シーユーシー・ホスピス
人事部長就任

経営企画部長 / 開発部長
大橋 悠介

2022年 株式会社シーユーシー入社
2022年 株式会社シーユーシー・ホスピス
経営企画部長就任
2023年 株式会社シーユーシー・ホスピス
開発部長兼任

総務部長 / リスク・コンプライアンス室長
天野 大吾

2021年 株式会社シーユーシー・ホスピス入社
2022年 株式会社シーユーシー・ホスピス
管理部長就任
2023年 株式会社シーユーシー・ホスピス
総務部長/リスク・コンプライアンス室長就任

地域推進部長
宮沢 隆之

2017年 株式会社シーユーシー・ホスピス入社
2023年 株式会社シーユーシー・ホスピス
地域推進部長就任

CORPORATE PROFILE
会社情報

社名	株式会社シーユーシー・ホスピス
設立	2017年3月
役員	代表取締役会長　濵口慶太 代表取締役社長　井上正明 取締役 Founder　吉田豊美 取締役　桶谷主税
資本金	１億円（資本準備金含む）
事業内容	ホスピス型住宅施設の運営 訪問看護事業所運営 訪問介護事業所運営 居宅介護および重度訪問看護事業所
取引金融機関	三菱ＵＦＪ銀行
関連会社	エムスリー株式会社 株式会社シーユーシー 株式会社シーユーシー・プロパティーズ 株式会社シーユーシー・フーズ ソフィアメディ株式会社 その他シーユーシーグループ関連会社
所在地	東京都港区芝浦３丁目1-1 msb Tamachi 田町ステーションタワーＮ15階

CUC HOSPICE

Copyright © CUC HOSPICE Inc. All Rights Reserved.